

特集 対談

言葉と出会う、自分と出会う



宮地 裕 (みやぢゆたか)

国語学者。大阪大学教授・帝塚山学院院長を経て、現在、大阪大学名誉教授。光村図書の国語教科書編集委員。



見城美枝子 (けんじょうみえこ)

TBSアナウンサーを経て、フリーに。海外取材を含めて、53か国以上訪問。現在、青森大学社会学部教授の傍ら、早稲田大学大学院博士課程で、日本建築の研究を進める。著書、対談、講演、テレビなどで活躍中。

えば、さまざまな立場の人が海外に行つて、英語を道具として使つて話すわけです。そういう時代にあつて、国語教育の重要性を私は改めて感じています。

私たちの世代は、戦後、アメリカ文化が強烈に入ってきたときに生まれ育つてるんです。団塊の世代です。それで育つてしまった自分が海外へ出て、何を恥じたかという、日本を知らないということなんです。戦後、私たちの親の世代は、日本の文化、伝統やしきたりというもの、敗戦とともに一度全部捨てた、捨てざるを得なかったわけです。そういうところに生まれてきた私たちですから、外国に出て行ったときに、最後のところで自分に自信が持てないのです。なぜ自信が持てないんだろうと思つたときに気づいたのです。欧米に限らず、アフリカでも、また、発展途上と言われる国々でも、自国の言語はもちろん、文化、伝統、そういうものをしっかり持った人は堂々としていらつしやるんですね。ああ、私たちは日本語をはじめ、日本の文化や伝統を軽視する中で生まれ育ってきたから、だから自信が持てなかったのではないか、というところに行き着いたんです。それで、「だめだ、これは。」と思つて、日本を勉強し直そうと思ひまして。

宮地…今、見城さんがお話しになったこととちよつと裏

人にとって言葉とは何か

宮地…僕のこれまでの人生を振り返ると、言葉というものは、人生そのものだと思つてます。言葉は人間の命というものだという気がする。僕が言葉を仕事の対象にしたからかもしれないですがね。子どもの時から、いろんな言葉の教育を受けてきて、ある時期から自分の言葉のことを考えるようになった。それはいつかなと思つと、十代の後半以降のことで、それまでは、僕はあんまり言葉を対象化して考えてはこなかったような気がする。それで、今、子どもに偉そうなことは言えないなというのが正直なところです。けれども、自分では子どものころ意識化できなかった言葉を、今の子どもには何とか少しでも意識に上らせてもらうことを努力するのが国語の教科書というものかなと。

このころ文部科学省の国語教育に関する施策は揺れ動いているようですけれども、むしろ見城さんのような、生活の中でのいろいろな言葉の問題にも触れ、子育ての経験もある方は、今の国語の問題、あるいは言葉の問題について、どういふお考えがおりなのか、お聞きしたいと思ひましてね。

見城…私は、日本語がとても大事だと思つていふんです。あらゆる場で必要なことといふのは言葉なんですね。例

表になるんですがね。昭和四十年代、日本語を教えるといふことで、初めて外国人を受け入れたのがタイのお嬢さん三人だったんです。国とか、民族とかの歴史の中で、タイといふのは独特で、十八世紀以降も、独立を保つて今まで来た、その自負といふようなものが、何となく態度で分かるんですね。これはやっぱりすごいなと思つた。彼ら自身のアイデンティティといつてもいいのかもしれないけど、自分の国や自分の民族といふ問題に関しては、ひよつとしたら我々日本人よりもしっかりしたものを持つていふかもしれないという気がしました。まあ、その後、何十年かつき合つてうちに、自然にお互いの理解が深まってきたように思つてますけれども。

自分の国のこととか、自分の言葉についての知識を、できる限り身につけてないと、外国人を相手にしたとき、いろいろ恥をかきますよね。

見城さんが日本建築を勉強されているのも、そのお話と関係がありますか？

見城…ですから、何とか日本を学び直そうと思つて、心理学で日本人の心理といふものを勉強しようとか、国文学で「源氏物語」を通して日本人の美意識を学ぼうとか、いろいろ考えてるうちに、私、人はどこで生まれ、どこで育つてくるんだろうと思つたのです。住まいの空

間の中に人と人の距離が育まれる。そこから、日本人の
人と人との礼儀、所作、立ち居振る舞いが育まれてきた
んではないかと。だから、どうしても住の構造、住空間
を勉強しようと思ったんです。そのことが分ければ、き
っと日本語というのはこういうことなんだと、日本人は
こういう気持ちでこういう表現をするんだという、何か
がつかめると思ったんです。住空間によって人をどう受
け入れるか、これは言葉としても関係があるんですね。
日本人が、「よろしゅうございますか。」とお伺いを立て
ていくとは何なのかとか、人が人とういう人間関係を
つくってきたかを建築の観点から論文にしようと思った
のです。例えば、門があり玄関があつて、人がその家へ
入るときに、もう人と人との距離が決まってくるわけ
ですね。そういうことから言葉も育まれてきたのではない
かと。

ファースト・ランゲージがあるから

セカンド・ランゲージがある

見城：そう考えますと、日本語と英語とは、かなり違
うと思うんです。

英語では、「go」というふうにすぐに「行く」がきて、
しかも、常に主語が「私は私は」とくる。非常に乱暴な

宮地：英語教育は小学校三年からやるのかと言つて
ど、どんなことになるか。僕が関係してた学校では、昔
から小学校二年生か三年生から外国人教師に教えてもら
つてるんですよ。だけど、お遊びしてるだけで、子ども
の中にはほとんど何も残つてない。しかし、彼らは、外
国へ行った途端にいろんな能力が身についてしまつてし
よう。だから、やっぱり現場に行かなきゃ英語教育一つ
でも本当のところはできない。特に小学校、中学校は。
だけど、お遊びでも、そのときに与えられたものが、何
かどこに残つてるといふことはあるんじゃないですか
ね。これは大きいと思いますよ。バイリンガルにする必
要は必ずしもないし、バイリンガルになる前に自分の言
葉をきちつとできなさいいけないのは、おっしゃるとお
りで、ファースト・ランゲージがあるから、セカンド・
ランゲージがあるんでしょう。いきなり両方やりなさい
と言つたつて、それは無理。

子どもたちに自国の文化や言葉を伝える

宮地：外国で暮らす中国人は、二世の子どもたちに母国
語をほぼ完全に残すけれど、日本人は、子どもが小学校
へ行く前にもう日本語を教え込むことを捨てちゃいま
す。それは、民族とか国語とかに対する考え方、価値観

言い方をしますと、突然、相手に対して殴るようなもの
だと思つんです。「私はきらい。」と言つて殴ると、相手
は、「こっちもきらい。」と返す。それがむしろ英語の礼
儀なんです。それに対して日本語は、できればそうなら
ないように延々と言い続ける言語だと思つんです。「私は」
を使わないで、「行きたいと思いますが」と、あいまいと
言われるけれども、闘争的ではない、殴り合いを最初か
ら回避するような心根を日本語はもっていると思つん
ですね。国語教育や家庭教育で、最初に、私たちが使う言
葉とは、このように心がこもつた言葉なんだ、文法とし
てはこうだ、ということをやった後に、対して英語は、と
いうように学ぶほうがよいのではないかと思つんです。

宮地：基本はそうだと思います。

見城：ところが、今日のように、ディベート教育とか、
カタカナ語がどんどん入つてきて、それまでの日本語が
押されているような状況で世の中が進むとなると、私が
言つてゐることはもう古いんでしょうか。

宮地：そう、日本全体がどんどん変わつてきていて、相
撲の横綱だって、今や二人とも外国人でしょう。まさに、
相撲の世界でさえ、変わるうとしてゐる。そういう中に
あつて、言葉の問題だつてほつてはおけないでしょう。

見城：例えば、小学校の英語教育などはどうでしょう。

が違つということがあるんでしょう。日本人はそういう
点では、母国といふのかな、母国の文化を残すのは自分
たちまでなんです。それを子どもたちに強制して残さ
せるといふことはできにくいらしい。中国人ほど母国の
意識が強くないからじゃないかと思ひますよ。

見城：私が建築を学んでいるのも、次の世代に母国の文
化を伝えていかなければと思つたからなのです。調べて
いくと、消えた日本語の中で、建築用語がいちばん多い
んではないでしょうか。襖すらあぶないですよ。

宮地：ものがないですからね。

見城：今の子は欄間なんて分らないでしょう？ 床の
間はぎりぎりだと思つけど、床の間に落とし掛け、掛け
軸があつて、床框、上がり框なんてなつたら、ますます
分らないでしょうね。

宮地：生活にないんですよ。

見城：縁側すらあぶないですよ。縁側といつたら、ヒラ
メのエンガワが出てくるかもしれないから（笑い）。こ
れは大変だと思つたんです。で、あるとき、これらを私
の世代で終わらせるのではなくて、私の世代が、また次
の世代に伝えなければならぬという非常な自覚
を持ったのです。それは、海外に何度か行つて、海外に
さらされればさらされるほど、自分をしっかり持つてい

なければならぬ、自国の文化や自国の言葉をしっかり持っていないと気がついたんです。以来、日本語や日本の伝統とか文化とかにすごく目覚めたわけで、遅かりしだけれど、せめて次の世代に伝えようと思ったんです。

宮地…生活がなくなると言葉もなくなるでしょう？ それをどうやって救うという大変だけれど、残されます？ 僕なんかでもマンション住まいだから、だんだん豊の生活を失くなる可能性がある。生活がどんどん変わったから、どうなんですかね。

見城…それは、住環境の変化に対応して建築の業界が提案してきたことで、選ぶと選ばざるにかかわらず、手にしてきたことだと私は思います。人が考えて吟味したのではなく、あるとき、どんどんカットされた。そして、自分が気がついたときにはそこにはなかった。こういうことであるなら、やっぱり、もう一度、置いてきたものを見てみて、これはいいというものだけでも、次の世代に復活させなければと思っていきます。ですから、うちはわざわざ和室を造ったんですけれど、そういうものでも何らかの形でやればできるはずなんです。

次の時代に生きる子どもたちは、選ぶ権利も選ぶ機会もなく、そこに立っているんだと思います。ですから

人生に目覚めるとき 言葉に目覚めるとき

宮地…自分を知ろうというかね、自分に向かい合う年ごろと、自分の言葉について考えたり、世の中の日本語というものを考えたりする年ごろと、この二つは一致してませんか、大体。

見城…そうですね。言葉は自分自身の中にもう一度^{はんすう}反芻するものでしょう。あとき言ったあの言葉は、あれでよかったかしらとか。そればかりでなく、自分を見つめるときには、だれしも文字にもどると思っんです。そうすると、私などとはあるとき突然、本を読みたくなくなりますね。

宮地…人生に目覚めるときと言葉に目覚めるときというのは割合に近いんじゃないかということなんです。僕の何十年を振り返るとそんな気がする。青春のまっただ中にあっては、詩を書いて文字に書き付けたときに、自分の思いをそこでもう一度振り返るようなことがあった。今まで文章なんか全然書かなかつた人が、ちよつとした手帳に書き付けるようになったとか、急に読書家になつたりするとか、そうすると、思いが自分に戻ってくる。そういう経験は、だれにでもあるでしょう。

見城…そうですね。それは、国語教育を受けたからでは

国語教育においても、前からのもので善かれというものがあれば、時代錯誤といわれようとも現代へ持ってきてあげる必要があるのではないのでしょうか。

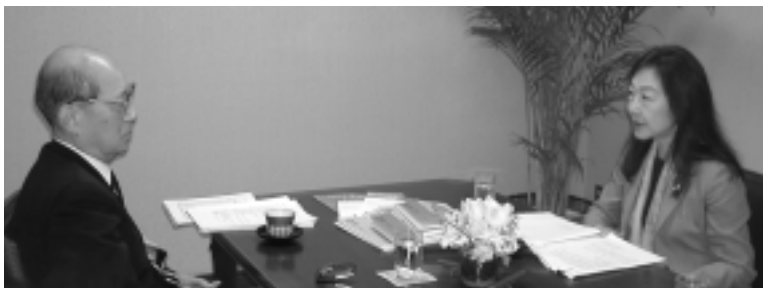
宮地…でもね、一世代、二世代あけても、復活するものは復活するんですよ。お茶でも、お花でも、お謡でも、みんな残ってるでしょ、不思議に。俳句だって、短歌だって、すごい力ですね、それぞれ。だから、残るべきものは伝統として残る。けれど、生活の中になくなった場合には、どうなんですかね。

見城…私、教育だけで終わつたものはないかなと思うんです。俳句とか、短歌とか、特に川柳なんかもそうですけど、なぜ残るのかというと、生活の中に楽しみとして根ざしたからではないでしょうか。例えば、句会をやる。それが風流であつたり、句会をきつかけに飲むとか、そういう生活文化に根づく部分があつたから、残っていると思っんです。やってみれば、奥が深くてももしろいということになりますから。

ないかという気がするんです。教科書で、名文をちよつとでもかじらせてもらったというような経験があれば、いつか言葉に目覚めると、先生がさっきおっしゃった、そのいつかがときどきやって来るんです。

宮地…よく、「伝え合う力」っていうことが言われますがね、これ、なかなか難しいことですね。「伝え合う」ためには「伝え合うものごと」があるはずですね。伝え合うものごとが、それぞれの人間の中にきちんとなければならぬんですよね。そのためには、一人ひとりの人間が「自分との対話」を積み重ねてきて、そういう人間同士が対話するときに、初めてほんとの対話っていうものが成り立つんじゃないですかね。もっと根本的には「考える力」が求められてるっていうことではないでしょうか。「考える」っていうことは言葉で考えるっていうことですからね。

だから、そういうことを国語は国語として子どもたちにきちんと教えないといけない。ただ、最初に申しましたように、「言葉で考える」と言われたって、子どものころには分かってないんじゃないかと。ただ、それは記憶





がないだけであって、記憶はないけれども何かが積み重なっていった、二十歳前後にはたとえて言葉というものはこういうものかとか、人生というのはこんなものかとか、自分と向き合う時期が来るでしょう。その時にならないと本当のことはなかなか分からないですね。だからといって、教えなくていいかという、そうじゃ全くなくて、子どもが自覚しなくてもいいから、先生たちは教えていかなければならない。教育というのは、残らないように見えるけど、残ってくるものなんだから。

見城…別に全真作家になる必要もないけれど、ある人はそれを日記という形で、自分の人生を綴っている方もいらっしゃるでしょう。ある人は俳句で表現するかもしれないし、私のように、話したり、書いたりということでもやりますでしょう。人それぞれの手法は違いますが、国語教育の結果、それができてるのではないのでしょうか。宮地…そう言っていたけるとありがたいんだけどね。

るか、今、アフリカは、世界はこうなってる、アフガニスタン、イラクはこうなってるというように、結局、その子から情報が来るとなったら、その子がある意味、長老の立場になってしまふ。マサイ族の世界は、ひっくり返るわけです。私は、そのときに、言葉が情報を操作し、言葉が情報をつかむわけですから、言葉の力というのは大変なことなんだと感じました。

宮地…今の遊牧民の生活と定住生活というのは、世界が全く違うでしょう。おっしゃるように、定住生活があると言葉が教育されたり、さらに第二、第三の言語ができる。遊牧したら普通はできないでしょう。言葉は国家だとか、国家は言葉だとよく言っけど、それに近いような現象が起こってくるんじゃないですかね。

見城…そのマサイの少女を見たときに、ああ国語は大事だと思いました。

私たちの子どもを見ていまして、それまでお母さんを通して覚えてきたり、幼稚園の友達同士で覚えてきた言葉は、小学校へ入って、あいうえお五十音表などを習い、初めてその仕組みが明かされていく。そういう、大変ダイナミックな出会いがそこにはあると思うんです。それまで自分が無意識に使っていた言葉には、実はこのような仕組みや約束ことがあったんだと。そういう新鮮

言葉は人としてのいちばんの基本

見城…私が取材でマサイ族に会ったときのことです。マサイの人たちは本来、草とともに牛をつれて移動する民族なんです。ところが、タンザニア政府が定住策をとるために学校をつくったというときに、ちよつと行きまして。初め、マサイの人たちは、そんな勉強をするより、どういう草がいいかを長老から教えてもらおうのがいちばんだと言っていたんです。で、長老の娘でいうけれど、お孫さんぐらいの歳の、かわいい女の子がいたんです。長老が、「この子はね、文字で名前を書ける。」と言ったんです。女の子は、誇らしそつにアルファベットで書いて見せてくれました。「マサイ語のほかにスワヒリ語もやってくるの?」と聞いたら、学校で習ってるという。教育というものを絵に描いたように見せられた思いと同時に、「この子の時代からすべてが変わると思ったんです。それは、言葉がマサイの集落を崩壊させるということなんです。今は、長老中心の社会ができていくわけですが、いちばん下にいる子どもが数年たつと、スワヒリ語ができて、多分その数年後に、英語とパソコンを覚えたら、世界とつながってしまうんですね。すると、長老は、「この小学生が中学生に」ところで、タンザニアの国は今どうなってる?」と聞かなくてはならない。いや、タンザニアにこ

な驚きに、目を輝かしてくれたらなと思うんです。

宮地…今、教育の改革がいろんな意味で起きています。いいこともあり、悪いこともありですけど、何か新しい体制をとらないといけないということは、国語教育の場合もあるような気がします。気持ちや考えを伝え合う力を育てる努力も必要です。その根本にある「考える力」も大事ですね。討論とかディベートとかも盛んなようですが、単なる言語技術としてでなく、考え合う力を育てるために役立ててほしいと思いますね。

見城…言葉は人としてのいちばんの基本だと思います。ですから、先生方はいろいろ大変なこともありますが、思いますけれど、めげたときは、「国語というのは基本なんだ。」と自分に言い聞かせて、もし、国語がつまらないと思っている子どもたちがいるとしたら、言葉と出会う喜びといったものをかみしめさせてあげていただきたいですね。

